

令和 6 年 5 月 21 日現在

機関番号：34519

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K17497

研究課題名（和文）移行期における慢性期の精神疾患を抱える人々が経験するケアに関する現象学的研究

研究課題名（英文）A phenomenological study of the care experienced by people with chronic mental illness

研究代表者

石田 絵美子（Ishida, Emiko）

兵庫医科大学・看護学部・准教授

研究者番号：50759058

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、慢性期の精神疾患を抱える人々が、看護ケアを如何に経験しているのかを記述することを目的とした。精神科療養病棟におけるフィールド調査と患者と看護師へのインタビューを実施し、各々の視点から分析した。その結果、患者たちの生活は様々な過去の経験から成り立ち、現実と妄想の中で自分らしく暮らしていた。彼らへの看護ケアは、患者たちへの深い理解、看護者間の相互理解や患者たちからの反応によって構成されていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を通じて、精神疾患を抱える人々の視点から、彼らがケアを如何に経験しているのかが明らかになることによって、地域で彼らへの対応に困難を感じている訪問看護師たちにとって、彼らの理解や関係性の構築においても示唆を得ることができると考える。また、病院と地域における患者たちの経験や看護ケアが明らかになることにより、今日の課題でもある病院と地域の連携において、一貫したケアを提供するための新たな指標づくりに貢献することが可能となると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to describe how people with chronic mental illness experience nursing care. A field survey in a psychiatric care ward and interviews with patients and nurses were conducted and analyzed from their perspectives. As a result, we found that the patients' lives consisted of various past experiences, and that they were living in their own way in the midst of reality and delusion. Nursing care for them consisted of a deep understanding of the patients, mutual understanding among the nurses, and reactions from the patients.

研究分野：医歯薬学

キーワード：精神障害者 看護師 経験 現象学

1. 研究開始当初の背景

2004年の厚生労働省精神保健福祉対策本部による精神保健福祉の改革ビジョンにおいて、「入院医療中心から地域生活中心へ」という方策が提示された。こうした状況を受けて、慢性期の精神疾患患者たちに対する看護の主体も、従来の療養型病棟での看護ケアから地域の訪問看護師によるケアへと移行していくと推察される。訪問ケアの効果として、入院日数は大幅に減少し(萱間,2005)、再入院の防止にも影響を与えていると報告されている(渡辺,2000)。それゆえ、地域で精神疾患を抱える人たちを支援する精神科訪問看護師の役割は早くから重視され、看護活動や技術に関する研究も精力的に推進されている。精神科訪問看護の技術に関する研究として、「関係性を創る技術」等の本人の退院への意識付けや看護師との関係構築に焦点をあてたもの(萱間,1999)や、関係性を基盤としたものとして、「利用者の状況を五感でみる」、「生きてきた体験の把握」等が明らかにされた(片倉,2007)。また、具体的な行為としてのケア内容として、「日常生活の維持/生活技能の獲得・拡大」、「対人関係の維持・構築」などが明らかにされた(瀬戸屋,2008)。しかし、精神科訪問看護では、数量系の大規模な実証データが極めて入手困難なゆえに、実証データが不足しており、更なるサービスの発展や質の向上に向けたケアの定量化や標準化のために、実践の具体的な内容やプロセスの記述が要請されている(瀬戸屋,2008)。

それでは、近年、「患者中心の看護」の重要性が指摘される中、精神疾患を抱える人々は、そのような訪問看護ケアを如何に経験しているのだろうか。実際に、精神疾患を抱え地域に暮らす人々は、看護師との認識のずれを感じたり、住民の偏見や無関心等により、地域での生活のしづらさを感じていること(森貫,2015)、障害受容や主観的QOLが低く、妥協して地域で生活していると報告された(下原,2012)。また、地域の訪問看護師たちは、利用者たちとの間で、「契約遂行」、「在宅での援助」などにおいて困難に直面しているという(林,2009)。近年では、精神科に特化していないステーションにおいても精神疾患を抱える人々を受け入れる事態が増加している。そのようなステーションの訪問看護師たちは、精神科の経験のなさから、対象の捉えにくさによる不安(渡邊,2009)や精神症状悪化時の対応の難しさ等(井上,2012)において困難を感じているということが明らかにされ、様々な支援策が検討されている(安藤,2016)。しかし、精神疾患を抱える人の視点から、彼らは如何に訪問看護師との認識のずれを経験しているのか、住民の偏見や無関心等は如何に生じているのか、また精神科訪問看護における対象把握の捉えにくさ、対応の難しさは、如何に生じているのかといった視点からは問われてこなかった。

上述したように、精神科看護においては、今後、地域の訪問看護の役割が重要になってくるといわれているが、現在も精神科病院には多くの長期入院患者が入院していて、病棟看護師の役割も依然、重要であると考えられる。精神科病院において実践されている看護技術としては、看護活動の分類(野嶋,2004)や移行期における看護活動(青木,2005)が記述され、また、臨床能力を評価する尺度開発のために、実践されているケア内容も提示されている(永井,2000)、野嶋(2004)の分類に従うと、近年では、「社会人としての自覚を促す」など、退院支援に関する項目が重視されていると考えられる。また、患者の安全や自我を守る「保護的調整をする」や「安らぎを提供する」という項目も、精神科病院における古くからの重要な項目といえる。他方で、病棟看護のこのような管理的、保護的な支援体制は、近年の退院支援が推進される中、無気力で意欲の低下した患者たちを作ってきたと批判的に捉えられてきた。一方で、生活環境の安全性やスタッフとの関係性において、患者たちの満足度は高く(多喜田,2001)、彼らは、心の安寧や、他者とともに過ごす時間の交流等により入院生活の中に楽しみを見出していた(梶川,2015)。また、看護師と患者両者が通じ合え、喜びなどの感情体験や安心感、満足感が共有されるような共感体験があることも指摘されている(田中,2015)。しかし、入院患者たちは、看護師たちのケアを如何に経験し、彼らの満足度の高い入院生活を成り立たせてきたのか、彼らのこころの安寧や共感体験は如何に生み出されてきたのかといった視点からは問われてこなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、1)慢性期の精神疾患を抱える人々が、各々の生活場所である病院や地域において、看護ケアを如何に経験しているのかを明らかにすること、2)そのような看護ケアを受ける経験が、彼らの日常生活を如何に成り立たせているのかを記述的に探究すること、である。

3. 研究の方法

本研究では調査研究期間を通じて、研究者が精神科病棟と地域での生活の場において、患者たちの生活に参加する参与観察を中心に、個別のインタビューを行った。

参与観察法では、患者一人ひとりの暮らし方に注目し、参加者と生活をともにする中で、彼らの様子や看護師らスタッフとの会話ややり取りを傍らで観察した。また、看護師らによる日常生活支援にも参加し、参加者の表情や動き等を記録し、観察後できるだけ早くフィールドノートを作成した。

個別インタビューでは、患者は30分から1時間程度、看護師やその他のスタッフ等については、約1時間を複数回実施した。患者には病棟での日々の生活、看護師には病棟での看護実践に

ついて、参加観察で得られた疑問について質問したが、多様な要素を含んだ語りを得るために、会話の自然な流れに沿って自由に話をしてもらうように心がけた。インタビューも IC レコーダーに録音し、逐語録を作成する。

データの分析：データは、患者や看護師などの個別的で具体的な一つひとつの経験を語られたままに文脈とともに記述し、文脈の中で意味が浮かび上がるその構造を探索した。

4. 研究成果

(1) 精神症状を抱えながら長期入院や入退院を繰り返す患者たちの経験

妄想を抱え長期間病院に入院している患者へのインタビューから、彼らの現在の生活は、入院当初、副作用の強い薬を服用しなければならなかったことなどの辛い治療経験や、入院前の仕事をしながら学校に通っていた大変な時代の経験などの様々な過去の経験から成り立っていることが明らかとなった。患者たちは、そのような遠い過去の辛い経験でさえも現在に至っても保持することにより、入院生活を受け入れ、慣れていったことが明らかとなった。

また、入退院を繰り返してきた患者へのインタビューから、彼らは現実と妄想を行き来しながらもその人らしさを失わずに入院生活を送っている経験が明らかとなった。そこでは、1人の患者の「自己評価が低い」という特性に注目して記述した結果、患者の「自己評価の低さ」は、元々の性格や発症前の体験に加えて、病状が落ち着く回復過程において自己の状態を客観的に観察したり、同じ病気の他患者を見たりする中で更新されていることが明らかとなった。そこでは、患者は精神症状や特性を自己の一部と感じるほどに病いと一体化していながらも、他方では、世間に見立てた自己によって、自らの過去やこだわりを非難していた。このようにして患者は、病気である自己を受容したり非難したりする両義性の中で、自らの行為を意味づけし、社会の中で活躍した経験を保持し、時には退院や服薬を拒否しながら日々を過ごしていることが明らかとなった。以上のことから、患者にとって、精神症状や特性などは病気によるものと認識しながらも、自らの実感としても経験され、身体の一部のような存在となっていた。それらは時に、不思議な感覚や、日常生活を困難にするものである一方で、語ることのできないほどの辛い過去の代わりとなって現在の患者を支えるものであると考えられた。

(2) 精神科病棟の看護実践

精神科病棟の看護師は、従来、長期入院患者への保護的・管理的処遇を非難されてきたが、本研究で実施した看護師へのインタビューから、「そばにいる」「認める」「家族になる」「退院する患者を病棟で待つ」というテーマで記述した看護師たちのかかわりは、看護として明確に意識されない日常のかかわりや、あえて看護を意識しないことによって実施可能となる困難なかかわりでもあった。しかしそれらは、患者たちへの深い理解、看護者間の相互理解や他職種の協力、患者たちからの反応によって構成され、患者たちを回復へと導くという一面を有する重要な看護実践であると考えられた。

また、精神科病棟の看護師たちは、患者たちの言葉にしたり、意識したりすることが困難な思いや意向を模索しながら、入院中だけではなく、退院後までも彼らを気遣い続けていた。そこでは、看護師たちはケアを通して、患者へ関心を向け、共感して、理解を深めていた。他方で、それらのケアの是非や効果は分かりづらく、長期の間、ケアは更新されながら、対象や場所を広げ継続される中で、看護師の「ケアされる」経験が生じていた。

(3) 今後の課題

慢性期の精神疾患を抱える人々にとって、看護師らによるケアは、彼らの幻覚や妄想を抱えた日常生活に既に組み込まれており、あえてケアされている経験として語られることもなく、見えづらい現象であった。他方で、そのような目立たないケアは、看護師の経験に関する「そばにいる」「家族になる」等という調査結果からもみてとることができた。今後、彼らの支援の中心となる地域社会や急性期病棟へも視野を広げて、そこでの患者や看護師の経験や彼らに生じている事象を詳細に記述し、明らかにしていくことが課題となる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 石田絵美子	4. 巻 第5号
2. 論文標題 精神科病院で入退院を繰り返す患者の経験 Aさんの語りの現象学的研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現象学と社会科学, 日本現象学・社会科学会編	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Emiko Ishida and Akira Ishida	4. 巻 14(2)
2. 論文標題 Experiences of a long-term female psychiatric in-patient with psychiatric symptoms in Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal of Nursing and Midwifery	6. 最初と最後の頁 22-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5897/IJNM2022.0491	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石田絵美子	4. 巻 32(2)
2. 論文標題 精神科病棟における看護実践の現象学的研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 保健医療社会学論集	6. 最初と最後の頁 47-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石田絵美子
2. 発表標題 「障害」や「病い」を持つ人々の日常を記述するということ
3. 学会等名 日本質的心理学会第19回大会 委員企画シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 石田絵美子
2. 発表標題 障害をもつ人々の経験の現象学的記述より「エンパワメント」について考える
3. 学会等名 日本現象学・社会科学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石田絵美子
2. 発表標題 精神障害を持ち生きる人々の経験－自己評価の低い患者の経験に注目して－
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石田絵美子
2. 発表標題 移行期における精神科療養病棟に暮らす人々の経験 60年間入院生活を送るAさんの日常に注目して
3. 学会等名 第5回臨床実践の現象学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石田絵美子
2. 発表標題 精神科訪問看護ステーションで働く看護師たちの経験に関する現象学的研究2023
3. 学会等名 第43回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------